

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 聖意体現

## ——マタイ伝第6章10節、他——

1983年3月6日

小池辰雄

御意の天のごとく地にも行われん事を 否定道 神さまは無限定のかた キリストは御意が天の如く地にも成っているひと 天地一如の世界 「エン・クリスト」(キリストの中に) 神という絶対的無限定者の現れ 無心即天心 もう御国は来てしまっている お前を通して天国を現じていく 神秘の世界

## 【マタイ6】

10 ……御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。

## 【マタイ26】

39 少し進みゆきて、平伏して祈りて言い給う『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給え。されど我が意のままにはあらず、御意のままに為し給え』

## 【詩篇103】

19 エホバはその寶座をもろもろの天にかたく置たまえり。 ……エホバにつかうる使者よ、エホバの聖言のこえをきき、その聖言をおこなう勇士よエホバをほめまつれ。 21 その万軍よ、その聖旨をおこなう僕等よ、エホバをほめまつれ。

## 【イザヤ46】

10 われは終の事を始よりつけ、いまだ成らざることを昔よりつけ、わが謀略はかならず立つといひ、すべて我がよろこぶことを成さんといえり。 11 われ東より鷲をまねき遠国よりわが定めおける人をまねかん。我このことを語りたれば必ず来たらすべし。我このことを謀りたればかならず成すべし。 12 なんじら心かたくなにして義にとおさかるものよ、我にきけ。 13 われわが義をちかづかしむ可ればその来たること遠からず、わが救おそからず。我すくいをシオンにあたえ、わが栄光をイスラエルにあたえん。

## ●御意の天のごとく地にも行われん事を

今日はマタイ伝6章10節の後半です。第一言が



「天にいます我らの父よ」

という。それから、「御名」「御国」「御意」という。今日はその第三番目の「御意」というところに来たわけです。

10……御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。という10節の前半の、

「御国の来らんことを」

までこのあいだやってしまったわけです。今日は、

「御意の天のごとく、地にも行われん事を」

と、それだけです。神さまの御意は天に行われているというわけです。天界というのは、もちろん霊的な天界のこと。これは、キリストはそれがよくお分かりになっている。たとえば、詩篇103篇の20、21節、

「21その万軍よ、その聖旨をおこなう僕等よ、エホバをほめまつれ。」

「その万軍よ」というのが天界のひとたちです。「その聖旨をおこなう」、即ち、天界において聖意が行われる。そして、「僕等よ」と言つて、これはまた地界の方にも戻ってきているわけです。そこで、天と地がそこでもつて歌われているわけです。

「20エホバにつかうる使者よ、エホバの聖言のこえをきき、その聖言をおこなう勇士よエホバをほめまつれ。」

天界のことを言いながら、また、地界のことも言っているし、あるいは全部これを天界と解釈しても構わないわけですが。

「エホバはその寶座をもろもろの天にかく置たまえり。」

と、詩篇103篇の終りの方はむしろ、非常に天界の方に内容が移っているように思われます。アブラハムよりも先に神と共に天界にあつたキリストですから、天界は即ち、聖意が行われているところです。ダンテが

「地獄・煉獄・天国」

と言いましたが、その「天国」「パラダイソ」のところですか。煉獄はまだそうはいかん。我々の現世は、ダンテの言葉から言えば、地上は正に煉獄的なところですから、もつとも、地上には地獄もあつて困りますけれどもね。戦争なんていうのは正に生き地獄です。

「御意の天におけるがごとくに、地においても行われますように」

と、非常に中身は簡単な中身なんです。これはしかし、

「御意が行われるように」

と言つて、自分は関わりがないような気持ちで祈つたつて、これはどうにもならん。祈りの世界はいつも一人称、二人称だと言いました。

「汝の意志が地に行われますように」

と言ふときには、「汝の意志」に対しては「わが意志」というものがあるわけです。汝の意



志は天界で行われる。それが地上でも行われるようにと言うときには、この「われ」はど  
うしてくれるかということになる。要するに、いつもこの「われ」が問題になる。

### ●否定道

イザヤ書46章10節から、

「10われは終の<sup>おわり</sup>ことを始<sup>はじめ</sup>よりつげ、いまだ成らざることを昔よりつげ、わが  
謀略<sup>はかりごと</sup>はかならず立つといい、すべて我がよろこぶことを成さんといいり。  
11われ東より鷲をまねき遠国<sup>とほくに</sup>よりわが定めおける人をまねかん。我このこと  
を語りたれば必ず来たらすべし。我このことを謀<sup>はか</sup>りたればかならず成すべし。  
12なんじら心かたくなにして義にとおさがるものよ、我にきけ。13われわが義  
をちかづかしむ可<sup>べ</sup>ければその来たること遠からず、わが救<sup>すくい</sup>おそからず。我すく  
いをシオンにあたえ、わが栄光をイスラエルにあたえん。」(イザヤ46・10)

ここで「わが義」と「わが救」がやはり同義語に使われていることは、前に言いました。

「遠国よりわが定めおける人をまねかん。始め言ったことは必ずやる」と。  
と。

「神さまの本願は必ず成る」

ということを10節で力強く言っておられる。

神と我との関係は、「どつちか」であつて、「どちらでも」ということではない。我々は  
相対的存在。神さまは絶対的存在。汝の御意が成るためには、この相対が消されなければ、  
この絶対は来ない。「絶対」というのは「対を絶する」、相手を絶つするという字ですから。  
神さまをまだ相対的に思っているうちはダメなんです、信仰は。

「神さまは絶対である」

ということとは、こちらの「対<sup>たい</sup>」は消えているということ。それでなければ、絶対としてな  
いわけですよ、

「私もそう思うんですが」

なんていうのでは。そう思おうが思うまいが、こつちの相対的な判断なんていうものはす  
つ飛ばしてしまう。それが、

「わが意<sup>い</sup>にあらず、汝の御意<sup>みこころ</sup>を成させ給え」

とキリストが言われた、ゲッセマネの祈りはそれです。マタイ伝26章39節、

「39少し進みゆきて、平伏して祈りて言い給う『わが父よ、もし得べくば此の  
酒杯<sup>さかずき</sup>を我より過ぎ去らせ給え。されど我が意<sup>い</sup>のままにはあらず、御意<sup>みこころ</sup>  
のままに為し給え』」(マタイ26・39)

キリストは父の御意を正に体現しているひとでした。だから、キリストは普段から我を殺



しているひとなんだ。

「私ではない、私ではない」

と、キリストは言っている。宗教の世界は——私は詩篇第1篇に書いたでしょ——「否定道」なんです。自分を立てていているうちは、宗教の世界には入れない。絶我するところに初めて宗教の世界が開示してくる。自分をどうのこうの、人をどうのこうのとやっているうちは、いつまでたつてもダメなんです。神のみの世界に入らなくては。これは絶対の世界、否定道です。本当の否定道は絶対の世界です。この「否定」は、「善と悪」と言つて悪をただ否定しているような、そういう相対的な否定ではない。

「善だの悪だの、清いだの汚れているだの」

と、相対的な判断をしているうちはまだダメです、もうひとつ乗り越えないと。分かるかな。相対的判断が悪いと言っているのではない。それは道德の世界です。宗教の世界はもうひとつ超えるんです。

### ●神さまは無限定のかた

神さまというものはどういうひとであるか。

「神は愛である。義である」

と言うのは、まだこれは本当は——ダメと言つてはいけないけれども——「義だ」とか「愛だ」とか言つて区別するような判断をしているうちはまだダメなんです。

だから、私の

「無の神学」

は普通は分からね。この「無」は、己に絶する無であると同時に、神さまは無限定のかたであるということなんです。無限定なものが義として現れたり、愛として現れたりします。けれども、神を限定して、愛だとか義だとか言ってしまったのでは、本当はダメなんです。パウロは仕方がなしに、「信・望・愛」ということを言いましたけれども、それはもちろん真理なんですけれども、神さまは信望愛渾然こんぜんとしたところの名状しがたきものなんです。

どうせ、私は生きているうちには誰からも理解されませんよ、いいんですよ、もう。そういう福音を私は説いているから。けれども、「異なる福音」を言っているのではないですよ。けれども、分かるような神さまは、いったい、神さまですか。神さまは分からないからこそ信ずるのではないですか。分からない道を進んで行くのが本当の進みではないですか。予想がついていたら、ダメなんです。

キリストは、自分が本当に無私となって無となって、無者として神さまについて来ました。

「我を見しものは父を見しなり」

という、そんな素晴らしい実存でした。だから、いきなり天界に彼は行けたんです。「わが意」というのは、決してキリストはなにか我欲的なことを言っているのではない。



「かくも従って、あなたと一つではないですか。行かしてくださいよ。けれども、あなたの御意を。もしこの酒杯——十字架のことです——を受けると仰るなら、行きます」

と。それは全く自分の罪の十字架ではない。ひとの罪のため十字架なんです。いきなり天界へ行けるひとがどうして十字架に架からなければならなかったか。我々一人びとを本当に贖いきるためであった。贖いきるんですよ。

「自分の信仰がどうだ、自分の実存がどうだ」と、そんなことではない。

「過去がどうだ、現在がどうだ、未来がどうだ」

ではない。完全に贖いきっている…(異言)…完全に贖いきっているキリスト。だから、私は無にされている。その現実に聖霊は働くんです。

●キリストは御意が天の如く地にも成っているひと  
キリストは、

「御意の天に成っている如く地にも成らせ給えと祈れ」

と仰ったけれども、キリストは御意が天の如く地にも成っているひとです。

「成らせ給え」

の前に、

「成っています」

という断定があるんです。「成っている」という断定があるから、彼は私たちにかく祈れと。だから、私はもつと大胆に言いますよ、

「御意は天の如く地にも成っております。私に成っています。あなた方一人びとりに成っています」

と。どういうことですか、これは。十字架で贖いきってしまったところに、聖霊がやって来ている。これが地にも成っている事実ではないですか。「成らせ給え」ではない。

「成っています。ありがとうございます」

なんです。未だかつていかなる註解者がそんなことを言ったか。どんなに私たちが破れ器であっても、成っているんです。

私はこの絶対恩寵をどこまでも突き進むだけです。

「御意が天に成る如く地にも成らせ給えというキリストの祈りが、もう成っているよ、お前は」

とはつきり言つてくださるから、

「ありがとうございます」

と。だから、



「いよいよ、成らしてください」  
 と、今度はその祈りが来る。既に「ザイン」(在る)であるところに、「ヴェルデン」(成る)がいよいよ成っていくんです。「ヴェルデン」しながら「ザイン」するのではない。既に救われて在るんです。だから、いよいよそれが現象していく。体現していくんです。どんなにそれが惨めな姿であってもいい。

### ●天地一如の世界

祈りとは、キリストの懐の中で祈ってくださいよ。祈りの世界は、

「こうなるであろう」

とか、そんな蓋然性がいぜんのものではない。使徒たちはみなそのような現実げんじつに歩いていました。聖書の言葉がなぜ凄いかというと、そのような現実から発している告白だからなんです。その現実の中に深く祈りいれば、ある意味において、もう沈黙せざるを得ない。万雷の響きよりも凄いんだ、この沈黙の響きの方が。

今朝のテレビの「心の時間」なんて、話を聞いているうちに、もう私はやりきれなくて、消してしまった。あんなことを言つて、みんながもつともらしく聞いているのでは。何だつて言うんだ。私は全日本に叫びたくなる。とにかく、私は自分の使命が果てるまで、叫んでやみません。

だから、

「御意の天に成っている如くこの地にも成りました。私はそのように成らせられました」

と、キリストは言っておられるんです。キリストは天から降臨したひとでしょ。天界をそのまま地界に持つてきたひとでしょ。

「天の地よりもはるかに高きが如く」

なんていう言葉があるけれども、そんなのではない。天地一如の世界なんです。

「今、霊界にあるところのキリストはホワイト・ホールである」(『エン・クリスト』13号、

1983年2月号)

と私は書いたでしょ。今度は、こっちが吸い上げられている。

「ここは天であり、また天は地である」

とでも言いたいくらいです。そうしたら、いいですか、一切を包摂しますよ。

「日本は滅びる」

と言う。しかしながら、この滅びる日本を本当に抱くものは誰か。聖霊の本当の愛を持つたひとです。審くのではない。聖霊の愛は十字架で極まったんです。

だから、私は、何と言われても、返事はしません。

「結構です。そうですか」



と。どん底に私はキリストと一緒に立ちますから。まだ相対的判断をしているうちは、どんなに良きそうに見えてもダメなんです。もう一つ奥の世界に入って、絶対の世界に入ると、もう人を「対<sup>たい</sup>」とも思わないから、全部包摂してしまう。これが本当の聖霊の世界なんです。聖しとして高くとまつてるのではないんだ、この聖霊というのは。そして、全部これを光の世界に変えてしまう。生命の世界に変えてしまう。愛の世界に変えてしまう。そのような、

「天地一如の世界が、御意の天に成るが如く地にも成っております」

と。これは本願のもの凄い力強い断定です。万人救済されるんですよ、内村先生の悲願であつたことが。

私はもうとにかく、キリストに突き抜けてしまったものだから、なにかこの頃、何とも表現できないです。この

「御意を地にも成させ給え」

が、「成っています」ということに、私は今日成ってしまったからね。まあ、こんな乱暴な解釈をさせられた。「解釈」と言っても、ただ頭で解釈しているではない。その現実が根底になかったら、

「成らせ給え」

という祈りが祈りにならないから言っているんです。既に賜っているんです、現実は。祈りが必ず勝利なんです、力なんです。

●「エン・クリスト」(キリストの中に)

この『エン・クリスト』(1980年創刊、小池辰雄主筆の季刊誌)という雑誌は、これは冗談じゃないよ、お題目ではないんだから。本当に「エン・クリスト」(キリストの中に)という表紙の題字をジーンと見て祈り込んでごらん下さい。キリストの中に入らなくて。キリストの中に入ってから、それから頁を開いてくださいよ。

とにかく、我々はみんなこの福音にぶつかって、そして、証<sup>あかし</sup>をして行かなくてはならない。何も、言葉が証ではない。実存そのものです。だから、

「天の如く地にも」

ではなくて、

「天が地に降<sup>くだ</sup>って、御意は成りました」

ということ。キリストというひとは天から地に降ってきた。降臨したひとでしょ。御意は成った。キリストは自分を完全に捨てきった。

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」と、絶対の世界を彼は歩いてきた。

「相対的に何のかんのかと言っているような世界ではないぞ」



とキリストは言っている。

「地にも成ったから、どうぞ、私が成ったように人びとをして成らしめてください」というのがキリストの祈りです。それを今度は、我々の祈りとして、

「成らしめ給え」

ということになった。けれども、我々の祈りの奥に、

「キリストがこの地に成らしめてくださいました。御意は地に成りました。地上は地上天国であります。それをまた地獄みたいにしてしているこの我々は誠に申し訳ない」と言っているなら、わかる。

穢土えどは既に浄土じやうどとされている。煩惱は既に菩提ぼだいで貫かれている。罪びとの中にこそキリストは宿りたもう。それを拒否したらば、もう滅びのほかはない。人間の善悪が滅ぼすのではない。絶対恩寵を拒否するから、滅びにくる。だから、

「神に立ち帰れ、たち帰れ」

と言っている。「悔改めよ」ではない。

「帰れ。神さまに帰れ。帰らせよ」

ということ。帰入の世界が本当の無の現実なんです。即、無限無量むげんむりやうです。

だから、キリストの力で、必ず天国は私たちを通して成っていく。我々の力ではない。ありがたいです、この御霊の力で。何ものも御霊と代えることができない。「御霊」というのが分からなければ、「キリスト」でいい。なおはつきりします。キリストが中に入ってくる。

### ●神という絶対的無限定者の現れ

だからもう、聖書はありがたいでしょうがないですよ、聖書の響きが。時々、聖書も蹟くような言い方をしているから、その奥を読まなければ。

「天の如く」

なんていって、天を仰いではダメなんです。天に成った御意は、天がくだってきて地に成りました。そのキリストの全実存の恩寵の現実がこの祈りの奥になれば、この祈りは本当の祈りにならない。

「もう、私の根底には成っています。あなたの御意は地上の私のこの破れ器の中に成っております。ありがとございませう。いよいよ成らしめてください」

と、こうなるんです。

絶対の神は、表現できないものが、愛となり義となり、怒りとなり、生命となり、いろいろになって現れてくる。この神という本体は無限定の世界なんです。無限定者なんです。それと同じように、この無限定的なものを現したキリスト自身は、これも表現できない。これが入ってきて、それから、私たちを通して、その人らしい在り方が出てくる。そして、福音が証しされていく。



「お前は絵を描いて証しろ」

と言われたって、私には絵は書けないんだ。私の賜った才能しか動いてこない。いいんだ、それで。ただし、

「その動いてきたものが絶対的な質を持つているか」

だけが問題なんだ。皆さん一人ひとりそうです。絶対的な質を持つているということは、相対面では相対特殊でいいんですよ。

「相対特殊において絶対なるものが動いているか」

ということだけが問題なんです。それは説明の奥の世界だから。表現できないんです、その絶対の世界は。

「突き抜けている私を見ろ」

と言いたい。だから、ペテロもパウロも、

「我を視よ」

と言ったのは、そのような烈々たるものが彼らの中に生きていたからです。

「私の信仰は」

なんて言って、もつたいぶっているような世界ではないですよ。私の言葉は少し烈しいけれども、仕方がない。烈しいけれども、内容は柔らかいものがいろいろ自由自在ですから。もの凄く、すべてを包括してしまう。

### ●無心即天心

『宇宙より還りて』という本がだいぶこの頃評判になっていようだな。あれはだいぶ、神秘的な宗教的なことを感じて来たらしいよ、宇宙に行ったご連中は。そうだろうね、遙か彼方から青い地球を見ていて、

「なんだ地球は」

なんていうわけで、もつと広大な世界に入ると、神秘的になるでしょうね。地球の上で、なんだかんだと戦争をおつ始めようなんて、バカらしいことをやろうとするから。それは内村先生は明治36年に、

「こんなことをしていたら日本はひっくり返ってしまうぞ」

と、敢然として神の側、キリストの側に立って、内村先生は戦いました。本当に先生は、もうあれはやつぱり聖霊の力です。

本当の無心の世界に入ると、天心になる。天の心になる。無心即天心になる。無心というのは「己の心が無い」ということですよ、心が無いということではない。

天が地に下って、御意が天における如く地に成らしてくださったのがキリストですから、その中に入って、どうぞこの祈りを祈りとしてください。そうしたらば、何か知らんけれども、もう何ものも恐れなくやって行けます。それには人が打たれるんです。どう思われたっ



ていいよ、人になんか。

まあ、私は初めてだ、この一節を今日のように捉まえたのは。それでもう、ありがたくてしょうがない。前に書いたものがあるが、なかなかしかし、素晴らしい文句があるね、やっぱり。

「自己の真の否定は、自ら否定できない」

自分で否定できませんよ、

根源的罪性がキリストの十字架において否定されていることを絶対恩恵として受けとることである。霊的転換によって、霊的実存のいのちに入り、成就されてゆくのである。」

（『聖意体現』の「四、聖意体現」より）

これは本当にその通り。前に『聖意体現』（1954年刊。「キリスト告白録第三卷『聖意体現』2000年刊に再録）という本を書いたからね、そこに書いてある。それに少し私は今日言ったようなことを補足しながら、いずれ『新約抜粋』（後に『聖書は大ドラマである』に変更）には載つけますけれども。

大事なことをいくつか載つけなければいいんだよ、頭から終いまで註解なんか書かなくなつて。それではみんな飽きてしまう。誰かの手紙に書いてあったよ、

「先生はだんだん簡単になつてきた」

なんてね。私は本当に簡単になつてしまった。

●もう御国は来てしまっている

だから、今の10節の、

「御国の来たらんことを」

というのは、もう御国は来てしまっているんだ、そこへ。御意がそのようにして我々を通して、我々の破れ器を通して、成っているでしょ、あなた方は。

「本当に今日は、こういうことがあなたによつて成りました」

と、感謝してください。そうやって、進んでください。メソメソする必要はないんだ。

「御言によつて動いたら、だいたい人に誤解されてしまったけれども、私はすつきり

しています」

と。それでいいんですよ。相對界を整えようとしたつて、これは整えられっこない。絶対に勇ましく歩いてください。そうすると、人は感ずるから。

「あれは本ものだ」

ということになる。本ものを感じできないような人になったら、もうこれはお終いだね。良心がなくなつたらお終いだ。

しかしながら、この頃の教育は困つたものだ。悪いことも悪いと思わないようなことだ。だいたいぶなっているようだ。とんでもない話だ。小学校から教育はやり直し。やり直しということは、教育者自身のやり直しなんです。教育者自身がやり直されたら、教育はやり直つ



ていく。教育者自身をそっちのけにしておいて、

「教育がどうだこうだ」

なんて、いくら技術をもってしても一向始まらない。むしろ、小さい子から学ぶところがあるくらいな話だ。幼稚園の児童なんてのは本当に純真だから。

「おきな幼児のこころ」

とキリストが言われた。それがだんだんおかしくなっていくから、その善さを強く育てていくことが本当の教育なんだ。「教育」というドイツ語の「エアツィーエン」というのは「引っ張りだしてどンドンそれを伸ばしていく」という字だ。

### ●お前を通して天国を現じていく

それで、あなた方もうれしくなったでしょ、ここところが。楽になったでしょ。キリストの中に入ったら、

「お前を通して天国を現じていくよ。御意を、私の意をやっていくよ。そうしたら、楽しいよ」

と、こういうわけです。

お釈迦さんが悟りを開いてから、49年間、大説法をしたわけだ。ところが、

「49年間で自分は一字も説かなかった」

と言った。そういう逆説的なものの言い方をした。膨大な説教だけでも、「一字も説かなかった」と。どういうことですか。

「耳で聞いているうちはダメだよ。目で見ているうちはダメだよ。口でどうのこうのと言っているうちはダメだよ」

ということですよ。それを身体で受けとって、そして、聞いた内容を自分で自証していくまでは、本当に聞いていることにならないから。だから、

「説かなかった」

というようなお釈迦さんは言った。

聖書の世界も同じことです。いくら聖書研究会なんてやったってね。耳を閉じてしまえ、目を閉じてしまえ、口をつぐんでしまえと。

### ●神秘の世界

ギリシヤ語の「ミレイン」という字は「隠す」「神秘」という字です。「神秘」というのは素晴らしい訳だね。

「かく神秘的に秘す」

ということですよ。神秘の世界なんです。神秘を嫌ってはダメです。神秘が嫌いだと、いつまでも聖霊の世界に入らない。肉の耳——これは仕方がない、聞こえるから——を通して、



「霊の耳で聴け、霊の目で視ろ、霊の口でものを言え」ということ。それが神秘の世界です。

「隠れたるに見たもう。隠れたるに聴きたもう」

とキリストが言われたでしょ。あの「隠れたる」というのがみんなこの「神秘」の世界です。

「エホバはわが避所」

と言うでしょ。私たちはキリストの中に入ると、見えなくなってしまう。キリストの中へ入ってしまうと、見えないですよ。キリストの中に入っている私は、皆さんに見えないんです。だから、分からない。自分もキリストの中に入ると、見えないものが、今度は見えなくなるんです。だから、聖霊の受けない人がいくら聞いても、分からないわけですよ。

「これはいかん。私はひとつ同じ世界に入らないと、これは響いてこない」

と。今、音楽が響いているのに、テレビやラジオという機械を通さないと、私はいくら耳で聞こうとしたって聞けない。媒介がないと聞けない。ところが、宇宙の音楽が、霊の耳には響いてくる。ベートーヴェンやシューベルトなんていう作曲家はもうその中に入っている。隠れたる現実の中に入ってしまうんです。そして、その隠れたる現実は時に応じて顕れてくる。それがみな証しの世界です。その人を通して、もの凄い建築となってみたり、もの凄い農作物になってみたりする。音楽となったり、文章となったり、いろいろするわけだ。編み物となったり、絵となったり。何だかっていい。その人の賜りたるものが展開していくのは、その見えざる世界に、この神秘の世界に入っていなければダメです。

「エン・クリスト」(キリストのうち)

というのは神秘の世界ですから。パウロもヨハネもペテロも、みんなそこから始まっている。そこをなして、

「パウロはこう言った。ペテロはこう言った」

なんて、何を言っているかと言いたくなる。だから、専門の音楽家よりも我々の方がその奥の世界を共通にベートーヴェンやバッハと持っているから、彼らの音楽は反って我々の方が本当に聞いているということになってしまう。歌うときにも、その中に入って歌えば、

「やつぱり、あれはちよつと違うな」

なんて。絶対に技術ではない。作曲家の魂の中に入って歌ったら、もう響きが違う。音楽の先生が何と判断しようといひよ。

「私は本当の響きを響かせているんですよ」

と、それくらいの自信をもって歌ってください。

